

## 鮮魚街道を行く

### 鮮魚街道 (なまみち)

江戸時代、銚子で水揚げされた鮮魚が利根川・江戸川を経て翌々朝には日本橋小田原町などの魚市場に並べられた。

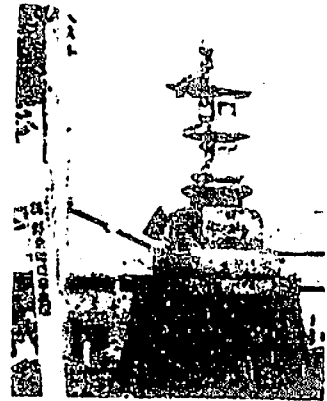
夏場は関宿まで遡って江戸川を下る全行程船輸送となるが、潟水期の8月～4月(旧暦)は利根川中流で陸揚げされ、江戸川沿岸まで陸送された。

銚子からの鮮魚輸送が軌道に乗ったのは慶安3年(1650)頃からのようで、当時は平塚(現白井市)まで船が入っていた。

寛文10年(1670)頃、堤が築かれて手賀沼に船が入れなくなったため、木下河岸で陸揚げして本行徳に送られるようになった。

これに対して、「御菜御運上場」であった布佐村は松戸まで「通し馬」とした。通し馬が正徳6年(1716)の裁許によって公認され、また新田開発に伴い近道も出来て、他に「抜け道」はあったものの、布佐～松戸が主流となった。

—距離と扱い量:(1駄は10疋)—  
木下～本行徳 約9里半(本行徳～日本橋約3里)  
寛政2年(1790) 約2,000駄  
布佐～松戸 約7里半(松戸～日本橋約7里)  
宝暦12年(1762) 約3,500駄



### ～鮮魚街道を辿る～

本会では、明治初年の迅速図と現在の地図を対照しながら、鮮魚街道を4回に分けて辿ってみた。

鮮魚街道も他の多くの街道同様、近年の市街化や道路網整備によって所々消滅し、幹線道路と一体化した。中間地点では、藤ヶ谷常夜燈の少し先から佐津間までの約半里(2km)が自衛隊下総基地で中断された。



自衛隊下総基地を境にして前半と後半に分けると、前半は雑木林や田畑など自然風景の中にあるが、後半は所どころに梨畑があるものの、市街地に一変する。それにつれて道標、馬頭観音像、庚申塔塚などの数がぐんと減る。竹ヶ花近辺では見付けることが出来なかった。

左に3本の馬頭観音像の写真が掲げてある。

これは松戸新田常照庵で見つけたもので、中央の像の側面に【布佐村 亀成村 馬持中】とある。この近辺にあったものと推測される。

いずれにしても、道筋だけでなく、掃りはどうしていたか、鮮魚の他には何を運んでいたか等々、次から次へと興味は尽きない。